

令和元年度文化庁認定

日本遺産「里沼」構成文化財ガイド①



日本遺産
JAPAN HERITAGE

SATO-NUMA 「里沼」の歴史的建造物

令和元年度日本遺産認定

里沼(SATO-NUMA)

— 「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—
(ストーリー概要)

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

日本遺産とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するもの

館林
の
里沼

日本遺産「里沼(SATO-NUMA)」の歴史的建造物

館林の沼辺文化が育んできた多くの文化財が日本遺産「里沼」のストーリーを構成しています。その構成文化財のなかでも、沼辺文化を育む場・もてなしの場などとして使われてきたのが歴史的建造物です。このガイドでは、「里沼」構成文化財のなかにある歴史的建造物を紹介します。

このなかには、博物館や資料館、イベント会場などとして現在も使われているものが多くあり、建築当時の使われ方は変わっても、沼辺文化を伝える場として残っています。館林市では「文化財ルネッサンス」として歴史的建造物を活用したイベントを募集しており、ここで紹介する建物でも活用されているものがあります。それぞれの歴史的建造物に携わる人びとは今もなお建物とともに沼辺文化を育み、後世に伝えていくことを目指しています。

人びとの営みの場であるこれら歴史的建造物は、見て、体感し、活用することで、沼辺文化により深く触れ、未来につないでいくことができます。

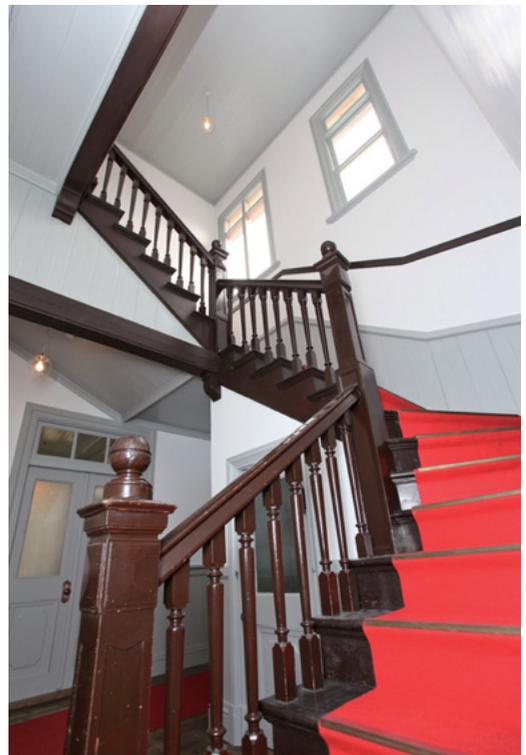
※「文化財ルネッサンス」とは

ルネッサンスは「再生」「復興」を意味する言葉です。「文化財ルネッサンス」とは、歴史的建造物や史跡を活用したイベントの募集を通じて、その文化財の持つ魅力を、活用する人とイベント参加者に味わってもらおうとする館林市の事業です。

目次

- P03…①正田醤油(株)旧店舗・主屋[正田記念館]
- P04…②創業期日清製粉館林工場事務所
[製粉ミュージアム本館]
- P05…③東武鉄道館林駅
- P06…④分福酒店店舗[毛塚記念館]
- P07…⑤旧館林信用金庫[市役所市民センター分室]
- P08…⑥旧館林二業見番組合事務所
- P09…⑦旧館林藩士住宅[鷹匠町武家屋敷「武鷹館」]
- P10…⑧三の丸土橋門(館林城跡)
- P11…⑨田山花袋旧居[館林市第二資料館]
- P12…⑩旧上毛モスリン事務所[館林市第二資料館]
- P13…⑪旧秋元別邸[つつじが岡第二公園]
- P14・15 …「里沼」構成文化財(歴史的建造物)マップ

それぞれの建造物についてより詳しい情報をお調べになりたい方は、館林市史編さん委員会編『館林市史特別編第6巻—館林の町並みと建造物—』(2018)をご覧ください。



旧上毛モスリン事務所内 階段



正田醤油(株)旧店舗・主屋

① 正田醤油(株)旧店舗・主屋 [正田記念館]

国登録有形文化財。城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」である多々良沼によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治6年(1873)に醤油醸造を開始した。

正田記念館は嘉永6年(1853)に、2代目正田文右衛門が米穀商の店舗・主屋として建てたもの。大正6年(1917)に正田醤油株式会社が設立されると、本社屋となった。昭和61年(1986)に鉄筋コンクリート造の本社屋が新築された後、昭和62年(1987)に、会社創立70周年を記念して内部に資料を収めた「正田記念館」として新たな活用がされるようになった。大規模な近世町家遺構として大変貴重な建物であり、丁寧な維持改修がなされ、創建当初の姿をとどめている。

館内には2代目正田文右衛門が天保9年(1838)に館林城主井上氏から拝受した蝶型さかな入れなど、江戸時代から現代までの、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料を展示している。

所在地	館林市栄町3-1
開館時間	10時～16時
休館日	土・日・祝日、夏季休業日、年末年始
入館料	無料
電話	0276-74-8100(正田醤油株式会社)

建物の特徴	
建築年代	嘉永6年(1853)
構造	木造2階建て 瓦葺き切妻屋根
面積	1階 194.43㎡ 2階 79.50㎡



正田記念館 1階展示室



創業期日清製粉館林工場事務所

②創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館]

明治43年(1910)に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造2階建ての洋風建造物。「実りの沼」多々良沼によって育まれた館林特産の小麦を原料に発展していった日本の近代機械式製粉の歴史を伝える。

日清製粉株式会社館林工場は、明治41年(1908)に代官町から現在地に移転し、製粉工場特有の多層階の工場や原料・製品保管倉庫などが建てられた。この建物は明治33年(1900)に代官町に建てられ、工場移転により解体された旧工場本館の部材を用いて、事務所として明治43年(1910)に再建された。昭和45年(1970)の会社創立70周年に合わせ、建築家渡辺仁により歴史資料を展示した「製粉記念館」として改修され一般公開された。

平成24年(2012)には創業110周年を記念して免震構造の建物に改修され、「製粉ミュージアム本館」として公開されている。製粉ミュージアムは日清製粉グループの創業からの歴史や、製粉というモノ作りの工程をはじめとした小麦と小麦粉に関する様々な情報を新旧製粉機械などの展示とあわせて提供。また、製粉ラボ教室や小麦粉粘土教室、クッキー教室などの体験教室も行われている。

所在地	館林市栄町6-1
開館時間	10時～16時30分 (入館は16時まで)
休館日	月曜・年末年始等
入館料	大人200円・小人100円
電話	0276-71-2000

建物の特徴	
建築年代	明治43年(1910)
構造	木造2階建て 瓦葺き変形寄棟屋根
面積	1階 117.3㎡ 2階 115.9㎡



製粉ミュージアム本館展示



東武鉄道館林駅

③東武鉄道館林駅

明治40年(1907)に東武鉄道が川俣から足利まで開通した際に館林停車場として開業した。明治末期から城沼とつつじが岡を訪れる行楽客の玄関口として、沼辺のもてなし文化のスタート地点になってきた。

駅舎は昭和12年(1937)建築の木造2階建てモルタル瓦葺で、正面中央に丸時計をはめ込み、その下にアーチ形の二つの飾り窓が配置された構造が特徴。何度か改修が行われ、昭和36年(1961)には跨線橋が撤去され、地下道が新設された。平成21年(2009)に橋上駅舎並びに連絡通路が完成し、地下道と西口の跨線橋が撤去された。

田山花袋の紀行文「東武鉄道」(『東京の近郊』大正15年)では、「館林は製粉が出来、汽車が出来モスリンが出来てから、非常に賑やかになった。(中略)つつじ園が都会の人々に知られて、毎春、遊びに来る客が多くなったのもその一因であろう」と記されているように、鉄道開通で東京方面から多くの人々が来るようになったことで館林は発展した。来客が増えたことで「もてなしの心」が芽生え、沼辺文化の源流となった。

平成10年(1998)には「関東の駅百選」に選ばれた。

所在地：館林市本町二丁目 1-1
電話：0276-72-4468

建物の特徴(駅舎)
建築年代：昭和12年(1937)
構造：木造モルタル2階 建て 瓦葺き寄棟 屋根



建築当初から残る正面アーチ



分福酒造店舗

④分福酒造店舗 [毛塚記念館]

国登録有形文化財。江戸時代から城下町で酒造業を営んでいた商家毛塚家の建物。城下に現存する数少ない江戸時代の町屋建築。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。

建物は江戸時代末から店舗として利用されたもの。町家の趣を残す格子戸や箱階段を有している。昭和50年(1975)に工場は郊外に移転したが、平成8年(1996)に、歴史ある店舗部分を残したいという所有者の想いにより保存修理が行われ、平成11年(1999)には館林市初の国登録有形文化財となった。

現在は毛塚記念館として公開され、分福酒造の歴史を伝える資料の展示のほか、地酒の販売を行っている。また、地元の作家らの作品展示・販売や展示会にも応じている。「歴史の小径」にある主要な建物の1つでもあり、市内に残る江戸時代の町家建築の代表例である。

所在地	館林市仲町3-15
開館時間	土・日 曜13時～16時(平日は不定休)
入館料	無料
電話	0276-72-0050

建物の特徴	
建築年代	江戸時代末
構造	木造2階建て 瓦葺き 切妻屋根
面積	
店舗部分1階	60.7㎡
店舗部分2階	41.4㎡



龍水の井戸



旧館林信用金庫

⑤旧館林信用金庫 [市役所市民センター分室]

大正15年(1926)、地元産業発展のために発足した館林信用組合の建物。組合は大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。当初は豎町(本町二丁目)の館林消防本部内に設けられたが、昭和9年(1934)に本建物を新築し移転した。

建設当時に流行していたアールデコ様式の柱とスクラッチタイトルの外壁が特徴的で、建築当初から目を引く建物だったことがうかがえる。日本で鉄筋コンクリート造建築が建てられはじめた時期の建物で、昭和初期の銀行建築では市内に現存する唯一のものになっている。

館林信用組合は昭和26年(1951)に館林信用金庫となり、この建物はその本店として使われてきた。平成元年(1989)に本店が本町一丁目の現在地に移転した際、旧本店は市の所有となり、現在も市民センター分室として市消費生活センター・更生保護サポートセンターなどに使用されている。

所在地：館林市仲町5-25

※現在内部は公開しておりません。外観をご覧くださいます。

建物の特徴

建築年代：昭和9年(1934)

構造：コンクリート造2階建て 陸屋根

面積：1階 175.09㎡
2階 171.19㎡
塔屋 16.28㎡



東側入口の装飾



旧館林二業見番組事務所

⑥旧館林二業見番組事務所

国登録有形文化財。芸妓置屋と料理店業の二業を取り仕切る役割を果たし、料理屋への芸妓の周旋、芸妓の管理、玉代の精算などを行っていた「二業見番組」の事務所。昭和13年(1938)の建築。館林の花街の中核となった。花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。

昭和19年(1944)に日清製粉(株)の所有となり、戦後には館林カトリック教会が借りていたが、昭和31年(1956)に市に寄贈された。昭和33年(1958)からは商工会議所の事務所として使われ、「産業会館」と呼ばれた。昭和52年(1977)からは本町二丁目東区民会館となり地区の集会所として利用されてきた。

木造2階建ての重厚な瓦屋根が特徴の近代和風建築で、2階に芸妓の稽古用の舞台と広間がある。左右対称の外観は東京歌舞伎座で建築家岡田信一郎が試みた和風コンクリート造による桃山風の意匠に強い影響を受けていると思われ、巧みな和洋折衷技法がみられる。

現在は内部を公開していないが、外観を利用してドラマの撮影などに使われることがある。

所在地：館林市本町二丁目
16-2

※現在内部は公開しておりません。外観をご覧ください。

建物の特徴

建築年代：昭和13年(1938)

構造：木造2階建て瓦葺き、入母屋造(西側)・寄棟造(東側)・千鳥破風(正面2階部分)・唐破風(玄関寄)

面積：1階 204.12㎡
2階 186.30㎡



2階大広間と舞台



旧館林藩士住宅

⑦旧館林藩士住宅 [鷹匠町武家屋敷「武鷹館」]

市指定重要文化財。館林藩に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺き屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。屋根の茅は、主に沼茅(葦)が利用されてきた。

沼茅の採れる城沼では、明治維新後、士族授産による開発に多くの館林藩士たちがかわり、蓮根栽培などが行われた。

元は外伴木(現尾曳町)にあり、幕末には館林城主秋元家に仕えた伊王野惣七郎の屋敷だった。明治27年(1894)に伊王野家は東京に転居することになり、親戚の山田家がこの家に入った。平成13年(2001)、山田家から市に寄贈され解体移築して鷹匠町武家屋敷「武鷹館」(現大手町)として復元された。

建物は中央に式台を持つ玄関があり、奥に寄り付・控えの間が続く。ごんまりした屋敷の入口に小型で質素な門を構え、その中央に一棟の住居を構えることから、中級武士の住居の特色を持つ。式台は上司にあたる上級武士が来訪したときに駕籠を式台に横付けしてここから入室するためのもので、家族はその左手にある土間を玄関にしていたと推定される。

現在は「武鷹館」の施設として公開され、建物を見学することができる。季節ごとに「むかしあそびをしよう!」「十五夜お月見会」などといったイベントが行われている。

所在地	館林市大手町5-10
開館時間	9時～17時(11～2月は16時まで)
公開日	土・日曜日、祝日
入館料	無料
電話	0276-72-0178

建物の特徴	
建築年代	江戸時代後期
構造	木造平屋建て 茅葺き寄棟屋根
面積	92.56㎡



「むかしあそびをしよう!」の様子



三の丸土橋門

⑧三の丸土橋門(館林城跡)

昭和58年(1983)、旧館林城三の丸北西の出入口に復元された館林城の城門。城沼を自然の要害とする館林城三の丸には、正門の「千貫門」と通用口の「土橋門」があった。館林城の建物は明治7年(1874)の大火によって、ほとんどが失われた。土塁や堀も近代化により多くが失われたなか、三の丸は保存のために旧藩士が買い戻し、旧城主秋元家に献納され、秋元家の意向により公園として活用された。昭和25年(1950)に秋元家から館林町へ寄付された。

土橋門も明治7年の大火で焼失したが、大正7年(1918)に旧城主秋元家が復元した。昭和25年に秋元家から館林町へ寄付された後は黒門と呼ばれる簡易な門が残されていたが、昭和55年(1980)に台風で倒壊した。本来あった土橋門を館林城のシンボルとして復元してほしいという要望を受け、昭和58年に復元が実現した。

現在の三の丸には文化会館や図書館が建っているが、土塁や土橋門があることで、館林城の雰囲気をもっとも残すエリアになっている。

所在地：館林市城町3
電話：0276-74-4111 (館林市文化振興課)

建物の特徴
建築年代：昭和58年(1983)復元
構造：木造平屋建て 本瓦葺き



土橋門と土塁



田山花袋旧居

⑨田山花袋旧居 [館林市第二資料館]

市指定史跡(旧居跡を含む)。江戸時代後期に建てられた茅葺きの武家屋敷で、館林出身の自然主義文学者田山花袋が、明治初期の少年期を過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛しており、小説「ふる郷」では「故郷を去りて後、われは幾度そのなつかしき一軒の茅葺屋根を夢にや見けん」と記すなど、この建物への想いととも城沼の景観が克明に描かれている。

元は館林城総郭の裏宿(城町)にあり、秋元氏城主時代は家臣石川宗内の屋敷になっていた。石川家は田山家の親戚にあたる。明治12年(1879)に田山家の屋敷となり、花袋は明治12年から19年(1886)までこの家に住んだ。昭和34年(1959)に市の所有となり、昭和56年(1981)に現在地に移築された。花袋の小説「ふる郷」では「わがこの家は八畳、六畳、四畳半の三間にて、この他に農家のごとき広き台所を備へたり」と記している(花袋の文は実際の間取りと異なります)。

旧館林藩士住宅と同じく、中級武士の住居の特徴をもつ。

現在は市の第二資料館内に移築され公開されている。

所在地	館林市城町2-3 (館林市第二資料館内)
開館時間	9時～17時(入館は16時30分まで)
休館日	月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日、年末年始
入館料	無料
電話	0276-74-9665(館林市第二資料館)

建物の特徴	
建築年代	江戸時代後期
構造	木造平屋建て 茅葺き寄棟屋根
面積	74.25㎡



田山花袋旧居 台所・座敷



旧上毛モスリン事務所

⑩旧上毛モスリン事務所 [館林市第二資料館]

県指定重要文化財。明治42年(1909)に、城沼を望む館林城二の丸跡に建設された毛織物工場である上毛モスリンの旧事務所、木造2階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを活かした工場群となっていた。花の季節、上毛モスリン従業員は慰安のためつつじが岡へと繰り出していた。

明治29年(1896)、館林町内に「毛布織合資会社」が設立し、明治35年(1902)に社名を「上毛モスリン株式会社」に改め、明治42年に旧館林城跡地に工場移転した。その際に事務所として建設されたのがこの建物である。上毛モスリンは昭和2年(1927)に共立モスリン株式会社となり、その後は日本毛織、中島飛行機となり、昭和22年(1947)に神戸生絲株式会社となった。昭和54年(1979)に工場地に市庁舎を建設することになったため、昭和53年(1978)に市へ譲渡され県重文に指定され、現在地に曳き移転された。

上げ下げ窓やエンタシス柱、階段の手すりなどに洋風建造物の意匠がみられ、新しさを感じさせながらも古来の和風建築の要素も残る。

現在は市の第二資料館内で公開している。平成23年(2011)には「ぐんま絹遺産」に登録された。2階はコンサートなどで利用され、ドラマやミュージックビデオなどの撮影に使われることもある。夕方から21時まで毎日ライトアップが行われている(ライトアップ開始時間は季節により変更されます)。

所在地	館林市城町2-3 (館林市第二資料館内)
開館時間	9時～17時(入館は16時30分まで)
休館日	月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日、年末年始
入館料	無料
電話	0276-74-9665 (館林市第二資料館)

建物の特徴	
建築年代	明治42年(1909)
構造	木造2階建て 瓦葺き入母屋屋根
面積	1階 245㎡ 2階 208㎡



1階内部のエンタシス柱



旧秋元別邸

⑪旧秋元別邸 [つつじが岡第二公園]

館林最後の城主秋元氏ゆかりの近代和風建築。明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭跡に建てられた。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。

当初は上毛モスリン株式会社の専務取締役・杉村熊三郎の建物として建てられたが、大正時代に旧館林城主秋元家の別邸となった。秋元家は明治維新後に東京に転居したが、近代にも館林につながりを持っていた。関東大震災の影響により、昭和5年(1930)には東京の秋元邸から庭石などが移設された。昭和36年(1961)に秋元家から群馬県へ売却され、つつじが岡第二公園の施設として公開されるようになった。

座敷と居宅部分がある主屋、洋間と和室・廊下で構成された離れ座敷、土蔵風の物置部分がある。建築時期の違う複数建物が一体化して別邸を構成している。城沼や鶴生田川を借景にした日本庭園には沼で投網をする秋元春朝の銅像があり、ツツジや花菖蒲、モミジなどが植えられている。

6月の「花菖蒲まつり」で活用され、11月下旬から12月上旬にはライトアップが行われている。さまざまなイベントに使われることもある。



主屋 座敷部分内部

所在地：館林市尾曳町8-1
電話：0276-74-5233(館林市つつじのまち観光課)
※現在内部は公開しておりませんが、イベント時に公開されることがあります。

建物の特徴

建築年代：[主屋] 明治43年(1910)から45年ごろ [離れ座敷] 昭和5年(1930) [物置] 昭和16年(1941)

構造：[主屋] 木造平屋建て 瓦葺き入母屋屋根 [離れ座敷] 木造平屋建て 瓦葺き寄棟屋根 [物置] 木造2階建て 瓦葺き寄棟屋根

面積：[主屋] 座敷部分 154.38㎡ 居宅部分 72.72㎡ [離れ座敷] 51.8㎡ [物置] 1階 31.4㎡ 2階 24.79㎡

- | | | |
|------------------------------|-----------------|---------------|
| ①正田醤油(株)旧店舗・主屋 [正田記念館] | ④分福酒造店舗 [毛塚記念館] | ⑧三の丸土橋門(館林城跡) |
| ②創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館] | ⑤旧館林信用金庫 | ⑨田山花袋旧居 |
| ③東武鉄道館林駅 | ⑥旧館林二業見番組合事務所 | ⑩旧上毛モスリン事務所 |
| | ⑦旧館林藩士住宅 | ⑪旧秋元別邸 |



- 凡例
- | | |
|----------|-------|
| ⊗ 警察署・交番 | P 駐車場 |
| ⊕ 病院・診療所 | ⊠ 学校 |
| 卍 寺院 | 〒 郵便局 |
| ⊏ 神社 | |

東北自動車道

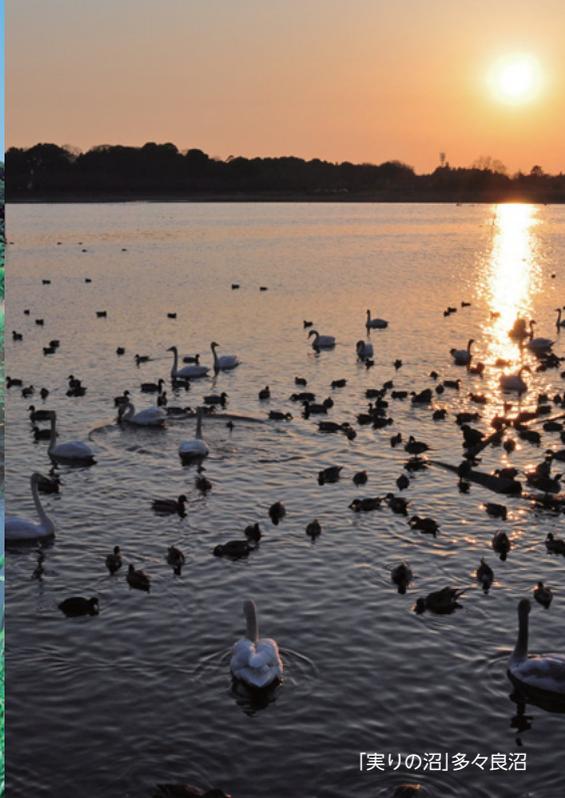
館林I.C.



至東京



「祈りの沼」茂林寺沼



「実りの沼」多々良沼



「守りの沼」城沼

館林市「日本遺産」推進協議会（館林市日本遺産プロジェクト）

〒374-0018 群馬県館林市城町3-1（館林市文化会館内）

☎ 0276-71-4111

<https://sato-numa.jp>

✕ @ta_satonuma2019



発行 | 令和3(2021)年3月
2刷 | 令和4(2022)年10月
3刷 | 令和5(2023)年12月

※無断転載を禁じます